

第七話 しあわせであることの義務

皆様、私は今夜のお話を、こんなたとえ話から初めてみたいと思います。

私の家にあるたった一つの時計がこわれてしまつて、さっぱり時間がわからず、不便でしかたがないので、思い切つて新しい時計を一つ買おうと決心しました。そこで、無けなしの財布の底をはたいて有金をかき集め、時計屋へと出かけました。いろいろ物色しておりますうちにフト目についたのが、りっぱな豪華な置時計です。ああ、あんな時計が買えたらなあ———と思ひながら冷やかし半分に値段を聞いてみました。ところが、案に相違して驚くほど安いのです。私の用意したお金で買えそうな値段です。これは掘り出し物だわい———と喜んで、その時計を買つて帰りました。さて帰宅して、早速ねじを巻こうと手にとつて巻きはじめましたところが、これはしたり、いくら巻いても巻いてもねじがかからないのです。私はあわてて、それを小脇にかかえ込み、さきほどの時計屋にとつてかえし、それを店の主人につきつけて申しました。

「君、これは、こわれているじゃないか。いくら巻いてもねじがかからないよ。」

ところが私度も一度驚いたことには、店の主人はいとも平然として

「ああ、その時計は動かないんです。動かぬ時計なんです。だけど、りっぱに使い途はありますよ。たとえば、お宅の床の間カマントルピースの上に置かれたら、大した飾物になると思いませんか？ また風の強い時など書類の上にデんとすえたらりっぱな文鎮になるじゃありませんか。」

私はしばらくあつげにとられて主人の顔を見つめ、それから憤然としてこう叫んだことでした。

「ばかばかしい。君、時計は時間を示すためにあるんだろ。その時計が時間を示さないなら、そんなものは一文の値打ちもないじゃないか。」

皆様、きつと皆様だつて、そうおっしゃつたに違いありませんね。確かに時計は時間を示すためのもの、それが時計の目的なのですからね。その目的を果たさないなら一文の値打ちもありません。

ところで皆様、これは時計ばかりとは限らないので、すべて物の値打ちというものは、その物が、その作られた目的にどれほどりっぱになつてゐるかいなかによつて定まるもの、ですから、たとえば、夜店を冷やかしてフット目についたニッケル製の安っぽい古ぼけた時計でも、

それが一日に一分と違わないで時間を示してくれるなら、それこそ、私にとっては又とない掘り出し物、時計がないので時間がわからなくて困っていた私はそれで大助かりです。それが、どんなに安っぽい、古ぼけたものであっても、時計としては完全なものです。その目的をりっぱに果たしているのですからね。

さて、皆様、今しばらく一緒に考えてみましょう。私たちのこの世のいのちには、二つの面があります。一つは生活の形式、あるいは形とでも申しましょうか、つまり、何をして生きていくかということ、も一度言い換えれば、どんな職業に、あるいはどんな地位についているかということ。そして、一つの面というのは、生活の態度とも言えるもの、つまり、その職業をどのような心構えで、どのような目当て、目的で果たしつづけるかということです。

この二つのうち、生活の形式、つまり、私たちが、どのような職業についているかということ、あまり重大なことではないのです。世の中の職業というものは、これを経済的な立場から見ると、需要と供給とのバランスをとるための手段だと言えましょう。すなわち、社会の求めに応じて必要なものを生産し、あるいは供給すると、その供給されたものがお金に換算されて報われ、今度は、供給者がお金をもって、自分に必要なものを求める……それが経済の原則であり、その原則の上に、実に多種多様な職業が生まれて来たわけです。ですから、それが、正しい

ものである限り、というのは、正当な法律によって禁じられたもの、あるいは、風俗や道義心をかき乱して社会に害悪を流すものでない限り、すべての職業はすべて正しくすべて聖く、すべて必要なものであって、その間に、どれがrippだとか、どれがつまらないなどという区別はないはずであります。近來、ともすると誤った資本主義的世界観から、職業の価値を、ひいては人間そのものの値打ちを、その収入の多い少いによって計ろうとする傾向が強いようですが、これとはんでもない価値の転倒であると言わねばなりません。

勤労者は、堂々と自分の勤労を供給し、雇主はおのが必要に応じて勤労が供給されたからこそ事業が成り立つのであるという感謝をこめて、その勤労に対しては、勤労者が、少くとも人間らしい誇りとゆとりを持った生活を営み得るに足るだけのものを正當に支払わねばなりません。そこに、上下貴賤の差別があつてはいけなはずなのです。

一国には一度に一人の首相があればよいので、国民全部が首相になる必要もなければ、また、日本全国の便所が全部水洗式にならぬ限り、だれかが便所をくみ取らねばならないのです。総理大臣と便所のくみ取り屋、真に妙な取り合わせになりましたが、二つながらに、全く同等に、社会に必要、かつ有益な、従ってrippな職業なのであります。このように、職業そのものに、上下貴賤の区別がないとすれば、私たちがこの世において、どのような職業を営み、あるいはどの

ような地位につくかということは、大した問題ではなくなるわけです。ですから、人間に、人間としての価値を与えるものは、さきほど申し上げた二つの面の一つとしての、生活の形式の方ではないのでありまして、私たちが、生きる生活を通じて、私たちの人間そのものに価値をもたらすものは、も一つの面、すなわち生活の態度なのでありましょう。つまり、どのような心構え、あるいは目的をもって、その職業を果たしつつあるかということなのでしょうね。

たとえば、一国の首相となった人が、首相としてりっぱに勤め上げて国家を磐石の基礎の上に置いたとしましょう。しかし、もしも、仮にその人が、ただ人々の賞讃の声を求め、おのが名前を歴史に残そうという名誉心や、傲慢な高ぶった思いに駆られて生きたのだとすれば、その功名も手柄も、実は、その人の人間形成には何の役にも立っていません。その生活の態度が、人間の正しい目的を追求していなかったのですから、ちやうど、さきほどの、外見は実に豪華でありながら動かない時計と、何の異なるところもないのです。

会社で働く人々で、もし、ただ上役の気に入られようという野心だけで、その仕事に従事するなら、たとえ、希望通り上役の気に入られて高い地位についたとしても、それは主人にほめてもらいたいばかりに演じて見せる猿芝居とどこが違うでしょうか？ もしもまた、ただ少しでも給料が上がるように、との心遣いだけで忠勤を励み、首になって路頭に迷わぬようにとの心配だ

けで仕事に携わるなら、エサを求め、鞭を恐れて車引く牛馬の類たぐいとどこが異なるのでしょうか？ それは人間存在の崇高な目的とはあまりにもかけ離れたみじめな姿ではないでしょうか？ 一国の宰相の印綬を帯び、大学者となり、大会社の統帥となつて、榮耀榮華と人々の喝采をほしいままにしようとも、人間としての存在の目的にかなっていないなら、それは動かぬ時計と何ら選ぶところもなく、うわべはいかに豪華に輝こうとも、その人のいのちは、一文の値打ちもないのです。ですが、それに反して、貧しい裏長屋に、人々から忘れられて黙々と車を引きつつ、だれにも知られずにこの世のいのちを終える一介のバタ屋さんのいのちでも、もし、その生きる一日一日が人間の目的にピッタリと瞳をすえたゆるがぬ一日一日のいのちであったなら、その人生は完全な人生であったといえましょう。

では、皆様、その人生の崇高な目的とはいったい、何なのでしょう？ と言つても、これは、そんなにむづかしい問題ではないと私は思うんです。全人類すべてに与えられた目的なのだとすると、だれでもが知らねばならぬことなのですから。従つて、どんな子供でも老人でも容易に知ることのできるものであるはず、いいえ、それは、実は人間だれでもがよく知っていることなのです。

私たちは今更らしく口にごそ出して言わないかもしれませんが、実は無意識の中に、ちやうど

うことなのです。

「私はしあわせでなんかないでもいい……と言う人があるなら、その人は人間を廃業せねばなりません。なぜなら、自分の正しい幸福を追求することをやめる人、すなわち、人間としての充足を求めず空虚ないのちを生きる人は、全人類の幸福のじゃまになるからです。

皆様はこんな話をご存じでしょうか？ 昔イタリイにミカエル・コスタという有名なオーケストラの指揮者がおりました。演奏会を間近に控えて、二百人余りの大楽団を集めて練習に余念がありませんでした。いろいろな種類の楽器群が混然と溶け合って美しいハーモニーを築き上げているとき、ひとりのピッコロ吹きが、ピッコロというのは笛の一種で楽器の中で一番小さいものなのですが、一本のピッコロ位と油断してちょっと、手を休めました。と、その途端、ミカエル・コスタの大きな声が響きました。「中止！ ピッコロは？ ピッコロは何をしてるんだ？」と。一本の小さなピッコロでも、存分に鳴り響いていなければ、その大楽団の作り出す壮大なハーモニーはくずれるのです。

私たち全人類は、各種各様な生活の形式に生きながら、種々雑多な環境の中にありながら、そのひとりひとりがみずから充ち足りたいのちを生き抜くとき、はじめて、全人類のいのちが、すばらしいハーモニーを響かせるのです。ですから全人類が調和のとれた平和な幸福な世界を作り

鉄が磁石に引かれるように、私たち人間のすべてが、この人間存在の目的に向かって宿命的に引きつけられているのです。

「いたい、それは？ そう、それは「しあわせでありたい！」という願いであります。生まれ落ちたばかりの赤ん坊が、オギャーと泣く呱呱の声こそ、その生涯かけて「しあわせ」を探索する遍歴の旅への門出の一声なのだと思ひましょうか。

こう申しますと、皆様の中に、きつと、「なんだ、くだらない。自分の幸福を求めるなんて、それこそ利己的な願いだ。崇高な目的でも何でもありません。自分の幸福を求めないか。」と、おっしゃる人があるかもしれません。ですが、そうではないのです。幸福とは、満ち充ちた、力強い充足のいのちのことです。ちょうど、水さしは水を湛えるために、花瓶は花をいけるためにあるのと同様、私たちの人生は、満ち足りた充足したいのちを営むための存在なのであります。まして、私たちは、自分の生命を力強く充足せしめ、満ち足りしめて行かねばならぬ義務があるのです。言い換えたなら、私たちのひとりひとりには必ずしあわせになれるはずでありますし、またしあわせにならねばならないのです。しかも、それは遠い将来のこと、自分たちの子孫の時代のことを考えて私たちが、その人柱になるというようなことではなく、きょう、今、現に、あるがままの環境の中で、私はしあわせになれるはずですし、またしあわせでなければならぬとい

たいものですね。
では皆様、また来週のこの時間に！

上げるためには、私たちのひとりひとりが、しあわせでなければなりません。私たちの中のたったひとりの人間でも、その生きるいのちが、空虚なから回りをしてはいけません。

ああ、満ち足りた充足のいのちの営み！ よくぞ生まれて来たと、自分のいのちを祝福するよ
うな幸福感！ 皆様、しあわせはどこにあるのでしょうか？

しあわせでありたい！ 切実な思いをこめて、こう自分自身にささやいてみましょう。今まで
気がつかなかったような気がしますのに、実は私の心の奥底では、あたかも飢え渴くように、こ
の一つのものを求め、それに憧れ、それに引かれていたことに、今更のように、驚かされるので
はないでしょうか？

チルチルとミチルの兄妹は、青い鳥を探し求めて、思い出の国、希望の国をさすりました。
私たちもこれから、しあわせの青い鳥を求めて、思索の旅に出ることにいたしました。と言っ
ても、それは、そんなに遠く、私たちの外の世界をさまようことではありません。ただ、私たち
の生きているこのいのちにからみつく、さまざまな雑念の笹藪をかき分けながら、このいのちの
一番奥底から湧き出て来る、静かな、しかしやむことのない一つのささやきを聞き分けたいとい
う心の旅路です。ただ、謙虚に、「しあわせはどこに？」と、私たちの探求の歩みを続け